

## 「浙江大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学農学部・研究科1年 中本 博

今回の経験を通して色々なことが学べた。

一つは文化の違い、そしてそこから生じる考え方の違いである。日本では譲り合いの精神、他者に迷惑をかけてはいけないという考え方が主流なのに対して、中国では自分を主張していくことが支持されている。例を2つ挙げてみる。中国語の授業中では求められていなくても積極的に皆が発言する。タイミングが早かろうと遅かろうと発言をする。その発言に他の人が続く。そうした姿勢が先生には喜ばれる。日本人からすると今、自分が質問以外の発言をすると他の人の学習を妨げてしまうかもしれない、もしくは恥ずかしくて発言できないということがしばしば起きる。中国においては、恥も他者への気遣いに先行して、自分の学習があるように思えた。2つ目はバドミントン場での場所取りである。大学でのバドミントン場でバドミントンをしようとした時、受付でお金を払いラケットと羽を渡された。このお金にコート代は含まれていなかった。いざバドミントン場に入ってみるとコートは全て埋まっていて、空きを待っている人がいた。待ち時間などは無く、空いたコートに随时入っていき、空かなければずっと待つものである。彼らは待ち人の事など考えず自分がやりたい分だけ打った。この文化の違いには驚かされて、日常のアクティビティを支配する考え方が根本的に異なる事を受け入れた。

次に英語能力について述べる。向こうの大学生の英語のスピーキング力は素晴らしいものだった。皆を案内する時に滞りなく英語で説明していた。これは予想通りだった。予想外だったのは街中の人達である。中国では英語教育が発達していると聞いていたため、中国語で分からないことがあっても単純な英単語を使えば伝わるだろうと思っていた。しかし状況は異なった。大手と思われるようなお店であっても英語はほとんど伝わらなかった。ローカルな言語が必要だと感じた瞬間である。いくら英語が世界的な公用語として認識されていても、その国に溶け込むためにはその国の言語、さらに言うならば方言も必要だと感じた。

ここまでいろいろと述べてきたが、私がこの留学を通して一番痛感したことは飛び込んでみることである。それも他人の流れに沿って飛び込むのではなく自分が先陣を切って飛び込むことだ。自分が突破口となることだ。中国に飛び込み、文化の違いを言葉ではなく肌で感じた。留学生の中に飛び込み否が応でも日本語が使えない環境となった。先陣を切る人も少なかったため、飛び込んだ先で得られる機会も多かった。自分が飛び込んだ先に他の人がついてくることも分かった。

以上が今回の留学で感じたことである。